

第二十章 都落ち — 義経

義経が、秋の小雨のなか赤子^{やや}を見に室町亭にやってきた。

郷子が両腕に抱いた産着の赤子を見せると、指先で頬などをつついて言った。

「俺に似ている」

「まだ生まれたばかりで、目もまともに開いていないのに」と郷子は笑う。

義経に請われるままに郷子が産着の赤子を手渡すと赤子がわっと泣き始めた。義経はおろおろして、赤子を抱きしめたまま部屋の中をあちこち歩き回りながらあやしている。そのうち赤子も泣きつかれたのか、義経の懷で泣き止んですやすやと眠り始めた。

義経は、ほっとした様子で愛おしそうに娘を見つめている。

郷子は、最近義経のこのような純粋な優しさと忍耐力に気付かされることがしばしばある。郷子は、義経が多くの女房や無頼の徒のような側近に好かれるのは、このような純粋な優しさと忍耐力によるのかもしれないと思う。

義経が郷子に赤子を返しながら言った。

「どうも女子^{おなご}というのは扱いが難しい。どのようにしたら喜んでもらえるのか俺にはさっぱりわからないよ」

（ご冗談でしょう）と郷子は思うが口に出してはいわない。

「お顔を覚えてもらえば、泣かなくなると思いますよ」

「毎日でも抱けばいいのかも知れぬが、それも難しくなった」

義経は、慚然とした面持ちで言った。

「なぜですか」

「お前も聞いているだろうが兄者が本当に刺客を送ってきた。そんな噂は前からあったが、俺は信用していなかった」

そう言うとき義経は、感情が高ぶって突然涙をぼろぼろこぼし始めた。

「なぜだ！ ちくしょう！」

義経が大声で怒鳴った。

赤子が目を覚ましてまた泣き出した。義経は、あわてて郷子から赤子を抱き取るとまたあやし始めた。義経は目を赤くはらしながら、反り返って全身で泣いている赤子を上下左右に揺らしながらしきりに機嫌をとっている。恐らく、自分も赤子のように無心に泣きたかったにちがいない。赤子が泣き止んでまたすやすや眠り始めると、赤子を郷子に返した。義経も赤子をあやしたことでだいぶ気が落ち着いたらしい。

「俺には、どうも納得がいかない。なぜ土佐坊昌俊などの取るに足らない奴を刺客として送ってきたのか。わずかばかりの恩賞で刺客を引き受けるような御家人の中でも最下位に位置する軽輩だ。しかも実戦の経験も少ない。そんな奴がわずか八十騎あまりのそ

れも闘うよりも逃げ足の速い奴ばかりを連れてきた。俺を随分甘く見たものだ」

郷子は父からの文の内容を思い浮かべた。

(本来武士でもない土佐坊と八十騎程度の寄せ集めの軍兵で、稀代の戦略家^{ひとたび}で一度戦となれば勇猛果敢に戦う義経を討つことができないことはなから読めていたはずだ)

「まさか。平家を滅亡させた総大将を甘く見ることはないでしょう。有力な御家人が全て辞退したからではないでしょうか」

「そうかもしれぬ」

「ですから、土佐坊が返り討ちになるのは想定内なのではないでしょうか」

「返り討ちになるのが判っている者をあえて刺客として送り込んできたというのか」

「もしかすると、あなたを本当に討つ気などなかったのかもしれませんが」

義経は、驚いて郷子を見つめた。

「そう思うか。そうだとしたら兄者の真のねらいはどこにあるのだ」

「兄が弟に刺客を送った。そして、弟がその刺客を返り討ちにした。兄弟が争っている事実が天下に知れ渡りますよね」

「なぜ、兄弟喧嘩を天下に公表する必要があるのだ」

「なにか深い意味があるのかもしれませんが」

「俺には、さっぱりわからないが、刺客が送られてきた以上むぎむぎと黙って討たれるわけにはいかない。そこで、叔父の行家の発案で、院御所に兄者追討の官符を賜りたい

と奏聞^{そうもん}をしていたところ、今日藤原光雅殿^{みつまさ}からこんな宣旨の写しをもらった」

そう言うと、義経は郷子に一枚の書面をみせた。

文治元年十月十八日

宣旨

従二位源頼朝郷^{きょう}は偏^{ひと}へに武威をひけらかし、朝憲^{あさけん}を懈怠^{けたい}す。宜しく前備前守源朝臣^{よる}行家^{さきのひげんのかみ}・左衛門少尉同朝臣義経等^{あそん}をして、彼の郷^かを追討^{きょう}せしむべし。

藏人頭右大弁兼皇后宮亮藤原光雅奉る

頼朝を追討すべき具体的な理由は何も書かれていない。

「宣旨と書かれていますから、法皇さまが御自分でご裁可されたものですよ」

「言うまでもない」

「それではこれからどうなさるのですか」

「宣旨が出た以上兄者は朝敵になった。叔父の行家が言うには、義経には絶大な人気がある。この宣旨をみせれば、四国や西国から将兵がすぐさま義経の下に集まってくる

いうのだ」

郷子は、下を向いた。顔を見られて、心の内を悟られたくなかった。

（この人は、部下として与えられた将兵を使って奇襲戦をするのは、得意なのだろうが、天下の情勢を見定めて、各方面から新たに将兵を集めたりするなどの政治的な動きをすることはできないのではないだろうか。いまや二十万騎以上の強大な武力を持ち、広大な所領を確保し、確固とした統治機構を有する鎌倉を相手に、わずかの部下しか持たず、恩賞の対象となる所領も持たず、組織体としての形をなしていない義経軍に参加して敢て鎌倉に戦いを挑もうとする者がいるであろうか）

「行家さまは、確信があるのでしょうか」

「叔父だけではない。法皇だって俺に出来ると思うから宣旨を出したのだ」

郷子は、うなずいた。義経が、こんなに風に相談してくれたのは初めてだった。だからこれ以上疑問を呈したりしていたずらに義経を刺激したくなかった。

「これからはまた忙しくなる。だから、娘を抱く機会もそれほどないだろう。しっかり、育ててくれよ」

義経は帰りかけたが、振り返ってこう言った。

「娘の名前は、俺の名をとって義姫にしよう」

義経は、そっくり残すと小雨の止まぬ中あわただしく帰っていった。

武蔵坊弁慶が、時々室町亭に立ち寄っては、郷子のところに来て赤子を見ていく。郷子は、当初弁慶が守護のために室町亭を定期的に見回り、そのついでに赤子を見ていくのだらうと思っていた。しかし、そのうち、弁慶が純粹に赤子を見たいために室町亭に立ち寄るのではないかと思うようになった。弁慶は不思議な男だ。弁慶は、そのいかつい顔と筋骨隆々とした巨大な体躯をもつ男の外観とは別に細やかな心情を持っている。郷子は、弁慶と話をしていても男と話しているという気がしない。そういえば女性との噂も聞かない。その分、義経に対する思い入れは大変なもので、義経の子供は自分の孫のように可愛いらしい。

弁慶の赤子を見る目は郷子も驚くほど慈愛に満ちている。そんな弁慶から郷子は、義経の置かれた状況を聞きだした。弁慶の話によると、鎌倉は既に手を打っていた。

範頼軍に対して、既に支配下ある西国にそのまま駐留し、領主達が義経の勧誘に乗らないように引き締めることを命じていた。

義経は、屋島と壇ノ浦との戦いで、義経軍に参加して一緒に戦った畿内近国の領主に宣旨の内容を知らせて、改めて義経の下に結集するように呼びかけが応ずるものはいなかった。

頼朝は自ら大軍を率いて、上洛することを決心したらしい。駿河国黄瀬川まで軍勢を進めると、現在はそこに駐留しているという。

（頼朝は、本気で義経を討つ気であることを天下に公表しているのだ）

「義経は、これからどうするつもりなのでしょう」

郷子は、不安になって訊いた。

「行家と相談して、都は攻められると弱いから、ここを退いて鎮西に行くことを考えているらしい。行家が、鎮西なら軍兵を集められるというのだ。とんでもない食わせ者が疫病神として舞い込んだものだが、判官殿は叔父上と敬っているから、我々が論しても聞く耳を持たない。まったく困ったものだ」

弁慶が帰った後、郷子は赤子に乳をあげながら、わが子の行く末を考えた。

(この子は、義経とわたしとの間に生まれたために、すでに厳しい運命を背負っているのだ)

義経が三歳ぐらいの童女の手を引きながら郷子の前を歩いている。童女は、顔を上げて義経にしきりと何かを話している。義経が童女に向かってなにやら返事をする、童女がおかしそうに笑い声を上げる。童女が後ろを向いて空いているほうの手を郷子に差し伸べるので、郷子が二人に追いついて童女の手を取り、三人で並んで歩いてゆく。行く先には、金色に彩られた柱で造られた門がある。童女は飛び跳ねるように歩きながら歌をうたっている。

空には真っ白い雲がかかっているが、ちょうどその門の上に来た白雲の隙間から太陽の光が降り注ぎ後光のようにその金色の門を浮き上がらしている。

三人は、手を繋いで黄金色の門をくぐって行くと、その先には大きな池があってその真ん中に朱色の欄干を持つ橋が向こう岸まで繋がっている。三人で手を繋ぎながら橋を歩いてゆくと、清らかな水をたたえた池には蓮の花が一面に咲き、その下には銀色の肌に赤い模様をつけた錦鯉がたくさん泳いでいる。橋の向こう岸には、色とりどりの花が咲き乱れている庭園が満開の桜の木に取り囲まれている美しい風景が広がっている。三人が橋の中ほどまでくると、そこにある炎のような模様をした小屋から、赤い目をかっと見開いた恐ろしい顔をして、頭に冠をかぶり、模様のついた金色の袈裟を着た男が出てくると三人の前に立ちふさがった。

大きな口に牙のような歯をむき出しにして義経に言う。

「ここはお前が来る様な所ではない」

義経は黙っている。

郷子は、この怪物が閻魔大王に違いないと思う。

「なぜでしょう」郷子が尋ねる。

「この者の心に訊いてみよ」

そう言うと、手に持った捕網を義経に巻き付けるとあっという間に二人とも居なくなってしまった。

郷子は必死で叫ぶ。

「わたし達も連れて行って」

誰かが身体をゆすっている。

郷子が目を覚ますと、志乃が心配そうに覗き込んでいた。

「大丈夫ですか」

「どうしたのでしょうか」

「うなされてましたよ」

郷子は、体に汗をかいて寝間着が濡れているのに気付いた。

「義経さまがお見えになりました」

志乃が言った。

「ええ！こんなに朝早くから」

郷子は、体から寝汗をすばやくふき取ると、寝間着を単衣に着替え、それに小袖を羽織って、簡単に髪をすくと義経の居る広間にでていった。

志乃が赤子を抱いてあとから付いてくる。

義経は直垂に萌黄緘もえぎおどしの鎧をつけて、今にも出陣するような身なりで立っていた。

郷子と赤子を抱いた志乃が広間に入っていくと、義経は郷子を見たが何も言わなかった。

「どうなされました」

郷子がおだやかに言うと、義経はそれには答えず、志乃から産着に包まれた赤子を抱き取るとまだ寝ている顔をじっと見つめて訊いた。

「もうお乳を飲んだか」

「いいえ、今朝はまだでございます」

「そうであろう」

郷子は、何をいっていいか判らず黙って義経を見ていた。

志乃が、静かに広間から出て行った。

義経は、黙って赤子を抱いていたが、しばらくして赤子を郷子に返すと言った。

「兄者が大群を率いて上洛するらしい」

「噂は聞いております」

「お前は当然知っておろう。俺は都を出立することにした。それで、赤子の顔を見に来た」

「どちらへ」

「お前には関係ないことだ」

郷子は、義経のそっけない冷たい態度に驚いた。

「わたし達は家族ですよ。一緒にお連れください」

「赤子を連れて行くわけにはいかないのは判っておろう」

「そうではございますが」

「俺と兄者の関係がこうなった以上、もうお前の役目は終わったはずだ」

「お役目などありません」

郷子は、悲しくなって叫んだ。

「いずれにしろ、今日来たのはお前を離縁するためだ」

郷子は、後頭部を殴られたような衝撃を感じた。

「なぜでございます。わたしが、正室としていたらなかったのでしょうか」

「そうではないが、お前は、兄者が俺の正室として勝手に送り込んできた女だ」

「そうではございますが、こうして二人の間に赤子までもうけたのに、離縁などあまりにも無体な・・・わたしも子供も帰るところがありません」

「お前は兄者の敬愛する乳母^{ひきのあま}比企尼の孫娘だ。兄者もお前には無理な事は申すまい」

「わたしは、頼朝さまを憎んでいます。あの人の慈悲など受けたくもありません」

「河越重頼には、もうお前を引き取るようにと伝令をだしたところだ」

「父からは、夫に尽くすのを第一と思え、もう実家はないものと思えといわれております」

「もう決めたことだ」

「わたしに妻として至らぬところが言ってください。直しますから」

「そんな風に俺の前で取り繕う必要はない。本心は離縁されて自由になりたいのであらう」

義経は、冷たく言った。

郷子は、義経のいやみな言葉に驚いた。まるで人が変わったような態度だった。

この人は、内心ではわたしを鎌倉の間者だと本気で思っていたのだろうか。

郷子は、自分の本心を判ってもらえないもどかしさから情けなくなって言った。

「あまりのお言葉。離縁されるのなら、娘を殺して、わたしも自害いたします」

「では、そうしてみろ」

郷子は、頭にかっと血が上った。

郷子は、義経が腰にさしていた短刀を引き抜くと、赤子の上に振り上げた。

絶望で目の前が真っ暗になった。

さすがに義経もあわてた。郷子からすばやく短刀を取り上げると言った。

「もう判った。俺も馬鹿ではない。一年も一緒に暮らしていれば、お前が貴族の娘などとは違って素直で嘘などつけない女である事は十分に判っている。お前を傷つけたのなら許して欲しい」

郷子は、まだ義経の真意をはかりかねて疑心暗鬼だった。

「では、わたしたちを連れて行ってくださいますか」

「お前の気持ちは有難いが、子連れで、戦などすることは無理であることは武士の娘であるお前には判っていよう。俺は、お前に実家に落ち延びてもらって俺の子供を立派に育ててもらいたいのだ。離縁すれば、実家で子供を育てる理由ができる」

「離縁はいやでございます」

「いや、ただの方便だと思ってくれればいい。その後俺がどこかで落ち着くことが出来

れば、そのときにはまた一緒に暮らすことも出来よう」

義経は、そう言うと逃げ出すように部屋から出て行った。

赤子が父が去って行ったのがわかったかのように突然泣き出した。

(わたしはこの子を殺そうとしてしまった)

郷子は、泣きじゃくる赤子を抱いまま涙が出ていつまでも止まらなかった。

(義経が、あのように冷たい言い方をしたのは、わたしと娘の身を案じての事だったのだ)

郷子は、そう判ると救われたような気がしたが、あのような嫌味な形ではなく素直に説得してくれたら、娘の上に刀を振り上げるようなこともせずに済んだのにと、うらみがましく思わざるを得なかった。

その後、郷子は、義経が取り巻きの女房達十数名と一緒に都を落ちるように説得した何らかの理由をつけて全員に断われ、静一人が同行することになったと聞かされた。

それを聞いて、郷子は「能天気なやつ」と小さく呟いたが、義経が郷子や娘のためとはいえ、あのような嫌味なやり方で実家に戻るよう説得しようとしたのは、自分を好んでいたと信じていた女房達に次々と裏切られたせいもあるのだろうと思い当たった。

しかし、義経がどんなに女にだらしない男であっても、郷子が恋をしたのは初めに肌を許した義経だけだった。今後どんなことがあっても義経以外の男に肌を許すつもりは毛頭なかった。だから義経が色々な女房と色事をもったり、時忠の娘を側室にしたり、静を西海に伴うことになっても義経に対する思慕は変わらなかった。わたし達は現世でも来世でも家族なのだ。義経が死ぬ時は自分も子供も死ぬ時なのだ郷子は心に決めた。

その夜、義経は静御前を伴い弁慶などの側近と数十騎程で都を落ちていった。それは、義経が壇ノ浦の海戦で勝利して、都に凱旋してから、わずか半年後のことであった。

郷子は、今後の自分と娘の身の振り方を決めなければならなかった。

常盤御前が、事前の連絡なしに突然室町亭を訪問してきた。夫の一条長成に知られないように密かに訪ねてきたらしい。常盤は、郷子の部屋に入ると挨拶する間ももどかしく、赤子を抱き上げるとじっと顔を見つめ、それから頬を摺り寄せた。赤子は、目を覚ましたが泣かなかった。寝起きはいつも泣くのに珍しいことだった。

「突然で驚いたでしょう。でも、あなたが都を出るかもしれないからその前にどうしても孫に会っておきたかったの。九郎もこうして娘が出来たというのにあんな事になってしまって。まったく、兄が弟を殺そうとするなんて頼朝という男は鬼ね。まだ、清盛のほうが情がありましたよ。それで夫から聞いたのだけれども、悪い時には、悪い事が重なるものね。九郎が、大物ノ浦から西海に船出したら、突然嵐になって海が荒れ、突風と逆浪を受けて船が転覆してしまったそうよ」

「ええ！まさか。それで義経は？」

郷子は、最悪の事態を予想して暗澹たる気持ちになった。

「それが助かったことは助かったらしいの。船が住吉ノ浦というところに打ち上げられ、そこから吉野山の方に向かったという情報があるのですって」

「そうですか」

郷子は、ほっと胸をなでおろした。

(義経は、大嵐の中をついて屋島に行った強運の持ち主だ。多少の嵐では死ぬわけがない)と郷子は思う。

「でも、船が転覆したために九郎の配下の者がほとんどいなくなってしまったのですって」

「義経のほかには、誰が助かったのですか」

「武蔵坊弁慶などの数名の側近と静御前は助かったらしいわ」

「まあ、よかった」

(やはり、義経と静は強運の持ち主なのだ)

「でも、こんなときに九郎も白拍子を同伴するなんて何を考えているのかしら」

常盤は、郷子に気を使っているのだ。

「いえ、いいんです。静は友達ですから」

常盤は、不思議そうに郷子を見つめた。

「それならいいけど・・・それはそうとして、九郎に対して、伊予守と検非違使の官職を解任する宣旨がでているのですって。つい先日、九郎に頼朝追討の宣旨を出したというのに、九郎が都を落ちると手のひらを返したようにこうですからね。聞くところによると、九郎が都を落ちたと聞くと、頼朝はすぐに黄瀬川から鎌倉に引き返して、その代わりに北条時政が、大軍を率いて上洛するらしいわ。それで、朝廷は、みんな青くなって、義経に頼朝追討の宣旨を出したのは間違いだった。すぐに、頼朝に義経追討の宣旨を出そうという事になったそうよ。ひどい話でしょう。それでもお前達男かと言ってやりたいわ」

常盤は、めずらしく感情的になっていた。いつもなら、そのような言い方は決してしないだろう。

「法皇の変わり身の速さは驚くべきものですね」

「あの人は、そうやっぴいまままで生き延びてきたのよ。いまに始まった事ではないわ」

「義経は、どうなるのでしょうか」

「九郎が、どこかで力をつけて都に戻ってくれば、また頼朝追討の宣旨がでることは間違いないわ」

常盤は、驚くほど楽天的だった。

「そうだといいのですが」

「でも、鎌倉の抜けめないことには、驚くばかりだと夫が言っていたわ。義経追討の宣旨をださせた上に、諸国に守護・地頭を置くことと、その維持のための兵糧米の徴収を認めろとってきているそうよ」

「守護・地頭はなにをするのでしょうか」

「守護は、諸国を逃げる九郎を見つけて逮捕する役。地頭は、荘園から徴税する役。鎌

倉の御家人を守護・地頭に任命して諸国の^{こくが}国衙や荘園におけば、鎌倉の威光で領主や荘園主を実質的に支配する事ができるうえに、年貢も入ってくるでしょう。朝廷の弱みに付け込んでやりたい放題なのよ。まったく盗人のように悪知恵が働く奴がいるのね」

郷子は、大江広元と三善康信のやり取りを思い出した。二人が「義経が土佐坊昌俊を返り討ちにして、都を落ちてくれたおかげで、諸国に守護・地頭を置く事を法皇に認めてもらえる。義経には、感謝しなくてはならないな」と言ってくすくす笑っているさまが目に見えるようだった。

「それで今後あなたはどうするつもりなの」

常盤は、きっと孫娘の事が心配なのだ。

「義経は、わたしの実家に伝令を出したと言っているのですが」

「そうなの。だけど、頼朝があなたの父河越重頼に義経追討を命じたら、重頼が義理の息子を討つわけにはいかなと断ったために頼朝がひどく怒っているようよ」

郷子は、父の性格からして、娘の婿を討つなどということはあり得ないと思うが、それを承知の上で命令する頼朝の陰険なやり方に憎悪を感じた。

「わたしは実家に戻るつもりはありません。父からも実家はないものと思えといわれています」

「清盛は、わたしと九郎を助けたけれど、頼朝は、清盛とは違うわ」

「わたしも都を出たほうがいいでしょうか」

「その方がいいと思うわ。夫がいるから一条の家は無理だけど、もし何処かに落ち着いたら知らせて。陰ながら助けてあげるから」

常盤は、そう言うと帰っていった。